

黙示録16章1-11節 「真実で、正しい裁き」

1A 天の聖所からの命令 1

2A ラツパの災いの貫徹 2-7

1B 獣の国の住民 2-3

2B 聖徒たちへの迫害 4-7

3A 災害を支配する権威 8-11

1B 太陽による炎熱 8-9

2B 獣の座 10

本文

黙示録 16 章を開いてください。黙示録の学びは、ついに「神の激しい怒りはここに極まる (15:1)」という所を読んでいきます。16 章全体を眺めたいところですが、第六の御使いによって起こる、ハルマゲドンの戦いについては詳しく見て行きたいので、次回に譲ります。第一の鉢から第五の鉢までを見て行きたいです。幻は、15 章からの続きになりますね。主がヨハネに、巨大な徴をお見せになって、それで神の怒りが地上に降ります。他の使徒たちも意識している、主の日における神の怒りです。パウロは、「ローマ 5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」と言いました。また、「1テサロニケ 5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにはなく、主イエス・キリストによる救いを得るようにならされたからです。」とも言いました。神の怒りが確実に、地上に住む者たち、神の福音を受け入れない者たちに降ります。

イエス様は、弟子たちに、「世にあつては患難があります。」と言われました(ヨハネ 16:33)。これまでにも、患難や災いがありました。しかしそれらは、アダムが罪を犯して世界の主導権が人から悪魔に委譲してしまったことによって、起こるものです。罪の刈り取りとして、地上に呪いがもたらされました。そして、悪魔によって起こっています。神の主権はそこにありますが、神がそれらの災いを願って起こしているわけではありません。しかし、終わりの日は違います。神は人間の数々の反抗と、そして彼らを支配している悪魔の仕業に終止符を打つために、究極の裁きとして直接、行われるのです。その災いの源がこれまでは、世の神である悪魔であったのに対して、終わりの日の災いは、神ご自身が世と悪魔を裁くために行われるのです。

その準備の様子、天における準備の様子を読みました。15 章 5 節からです。⁵その後、私は見た。天にある、あかしの幕屋である神殿が開かれた。⁶そして七人の御使いが、七つの災害を携えて神殿から出て来た。彼らは、きよく光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。⁷また、四つの生き物の一つが、七人の御使いたちに七つの金の鉢を渡したが、それには世々限りな

く生きておられる神の憤りが満ちていた。⁸ 神殿は、神の栄光とその御力から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその神殿に入ることができなかった。」このようにして、神の聖所から直接出て来た御使いによって、彼らが鉢をぶちまけることによって、地上に災いが下ります。

1A 天の聖所からの命令 1

¹ また私は、大きな声が神殿から出て、七人の御使いに、「行って、七つの鉢から神の憤りを地に注げ」と言うのを聞いた。

ここで読むように、神殿そのものから大きな声がしています。神ご自身が直接、これらの御使いに命令を下しているのです。これはまさに、司令官が他の指令系統を全て飛ばして、現場の兵士に命令を下しているような様です。「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。(ヘブル 10:31)」とあるとおりです。

2A ラツパの災いの真徹 2-7

1B 獣の国の住民 2-3

² 第一の御使いが出て行き、鉢の中身を地に注いだ。すると、獣の刻印を受けている者たちと獣の像を拝む者たちに、ひどい悪性の腫れものができた。

主が御怒りを表しておられるのは、「獣の刻印を受けている者たちと獣の像を拝む者たち」であります。獣の国の中に生きている住民がその御怒りの対象です。獣の国に生きている人々は、何をしていたのでしょうか？ 13 章です、「^{3b} 全地は驚いてその獣に従い、⁴ 竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣も拝んで言った。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」」そう、竜を拝んでいた人々です。悪魔を意識的に選び取った人々です。もっと突っ込んでお話しすれば、神の福音を意識的に憎んだ人と言えるでしょう。その背景がテサロニケ第二 2 章に書かれています。「2:9-12 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、¹⁰ また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。¹¹ それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。¹² それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。」神を意識的に拒む者たちが、悪魔の偽りを信じ、それで悪魔への裁きに応じて自分たちも裁かれているということです。

既に主は御使いによって、獣の国の住民に警告を発しておられました。「また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「14:9-11 また、彼らの後にもう一人、第三の御使いがやって来て、大声で言った。「もしだれかが獣とその像を拝み、自分の額か手に刻印を受けると、¹⁰ その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖な

る御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。11 彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る。獣とその像を拝む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者には、昼も夜も安らぎがない。」それにもかかわらず、彼らは頑なにしているのです。

そしてその災いですが、既に主は、エジプトにおいてこの災いを下しておられました。「出エジプト 9:9-10 それはエジプト全土にわたって、ほこりとなり、エジプト全土で人と家畜に付き、うみが出る腫れものとなる。」10 それで彼らは、かまどのすすを取ってファラオの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と家畜に付き、うみが出る腫れものとなった。」かつて神がエジプトに下させた災いは、終わりの日に全世界の規模で行われることの前味であったことが分かります。

³ 第二の御使いが鉢の中身を海に注いだ。すると、海は死者の血のようになった。海の中にいる生き物はみな死んだ。

七つの鉢による災いが、第七のラツパの災いから出て来たことを思い出してください。ラツパによる七つの災いにおいても、海に対する災いがありました。「8:8-9 第二の御使いがラツパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。9 また、海の中にある被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。」とあります。つまり、三分の二の海はそのまま残っていたこととなります。けれども、第二の御使いによる鉢の災いは、全ての海の中の命が死にます。これが大きな違いです。思えば、東日本大震災の時に、津波の被害において私たちは沢山の被害を受けた地の映像を見ました。けれども現地に行くと分かるのですが、津波が押し寄せてきたところが、目取るように分かるのです。まるで映画のロケ地のようなものでした、津波が押し寄せていないところは、まるで何事もなかったかのように日常生活を歩むことができていたようでした。

もし、そのように残されたところがあると、どのような思いが起こるのか？と言いますと、「私はやっていける」という傲慢です。神に対する頑なさ、その反抗心が、その災いを受けていない部分を見てさらに強まるのです。雹の災いがエジプトに下った時のことを思い出してください。「出エジプト 9:31-34 亜麻と大麦は打ち倒されていた。大麦は穂を出し、亜麻はつぼみをつけていたからである。32 しかし、小麦と裸麦は打ち倒されていなかった。これらは実るのが遅いからである。33 モーセはファラオのもとを去り、町を出て、【主】に向かって両手を伸べ広げた。すると雷と雹はやみ、雨はもう地に降らなくなった。34 ファラオは雨と雹と雷がやんだのを見て、またも罪に身を任せ、彼とその家臣たちはその心を硬くした。」まだ小麦は生えていなかったのも、雹の災いを免れたのです、それで頑なになりました。次に主は、いなごの災いを下されます。それで根こそぎ、作物は喰われました。神は、災いを下される中においても、そこに憐れみを示しておられます。彼らを滅びることを最も望んでいないのは、神ご自身です。誰一人滅びることを望んでおられません。とこ

ろが、人間の頑なさは、その憐れみでさえ、自分は大丈夫だ、だから神は要らないという強情さをさらに補強してしまう愚かさです。

そしてここで、「海は死者の血のような血になった」とあります。恐ろしい描写ですね、単なる血の色ではなく、死者の血のような血です。そしてこれはナイル川に対する神の災いを思い出しますね。川が血になりました。

2B 聖徒たちへの迫害 4-7

⁴ 第三の御使いが鉢の中身を川と水の源に注いだ。すると、それらは血になった。

第三の御使いの鉢は、「川と水の源」です。七つのラツパの災いにおいて、川と水源に大きな星が落ちました。「8:10-11 第三の御使いがラツパを吹いた。すると、天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちて来て、川の三分の一とその水源の上に落ちた。11 この星の名は「苦よもぎ」と呼ばれ、水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。」ここでも、三分の一のみが苦よもぎのようになったのであり、三分の二は残っています。水については、私たちは水道水に慣れているので、なぜ水を飲んで死んでしまうのか？ということの感覚が良く分かりません。けれども、浄化されていない水であれば、大抵の場合、飲めば病になります。そして酷い時は死にます。ここではちょうど、隕石のようなものが天から落ちてきたのですから、放射能に汚染されたような状態になったのでしょう。そして、第三の御使いの鉢においては、先の血になる災いと同じように、血になりました。

⁵ また私は、水をつかさどる御使いがこう言うのを聞いた。「今おられ、昔おられた聖なる方、あなたは正しい方です。このようなさばきを行われたからです。

「水をつかさどる御使い」がいるとのこと。主が災いを下す時も、また災いを留めておられる時も、御使いを遣わし、御使いを用いておられることがあるようです。黙示録 7 章においても、14万4千人の神の僕の額に印を押してしまわないうちは、「7:1 私は四人の御使いを見た。彼らは地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけないようにしていた。」とありました。

そして、御使いが主をほめたたえています。初めに、「今おられ、昔おられた聖なる方」と言っています。他の写本には、「常にいまし、昔いまし、後に来られる聖なる方」となっています。いつまでも変わらずにおられる方、そして永遠に生きておられる方ということ。そして、

この方が聖であられ、そしてこれらの災いを下してくださったので、正しいと言っているのです。私たちが黙示録における神の災いを読む時は、神への畏敬と言いましょか、口で軽々しく批評

することできない、主への恐れを抱かないといけないでしょう。いわゆる、ホーラー映画とか、エンターテインメント的な恐怖を呼び起こすようなことが、神の災いではありません。神の災いには、聖さや正しさに対する人々の反抗への裁きがあるということです。そして、私たちはこの地上において、神のなされていることの正しさが分からないことがあります。世にある不条理、不可解なこと、それらを全てなぜか、理由が知らされていません。けれども、ここで御使いが言っているように、主がなされていることについて、確かにあなたは正しい方です、と言える時がきます。正しい裁きを見ることが出来るからです。

⁶ 彼らは聖徒たちや 預言者たちの血を流しましたが、あなたは彼らに血を飲ませられました。彼らにはそれがふさわしいからです。」

「聖徒たちや 預言者たちの血を流しました」というのは、獣の国における、イエスの名を守る者たちに対する迫害のことです。「13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした。」このように血を流させたのだから、今度は、血となった川の水を飲まなければならなくなる、とされています。

聖徒たちに対する迫害に対して、神は敏感に報いてくださいます。迫害と困難の中にあつたテサロニケ人に対して語られています。「2テサロニケ 1:4-7 ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。6 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」主は黙示録の中でも、何度となく、信仰と忍耐が必要であると言われて、それで神が必ず報いてくださることを教えておられます。キリスト者でいることが難しい社会にいて、私たちはこのことをしっかりと心に留めて、気落ちしないでいることが大切です。

⁷ また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ、全能者なる神よ。あなたのさばきは真実で正しいさばきです。」

ここでの「祭壇」とは、6章9-10節における、信仰のゆえに斬首された人々の声の一つにあります。「子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んだ。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」」この叫びが、確かに、「真実で正しいさばき」と言わせているのです。祭壇であるのは、火による献げ物

の青銅の祭壇は、神の裁きを示しているからです。

3A 災害を支配する権威 8-11

1B 太陽による炎熱 8-9

⁸ 第四の御使いが鉢の中身を太陽に注いだ。すると、太陽は人々を火で焼くことを許された。

七つのラツパの災いでは、第四の御使いがラツパを吹き鳴らした時に、太陽の三分の一が光を失ったとありました。ここでは意表を付いて、全てを真っ暗にするのではなく、一度、太陽の炎熱をそのまま地球にもたらすという災いを下します。

太陽の光というのは、私たちの生命の源です。なぜ、ここまで適切な光線をくれるのか？と感心します。暑すぎてもだめ、少なくても寒すぎてもだめです。けれども、次第にこの光線と熱の流れにバランスが崩れています。神が、そのバランスを少し崩されるだけで、炎熱で人々が焼かれてしまうのです。今は恵みの時です。主は、私たちに敵を愛しなさいと命じられて、こう言われました。「マタイ 5:45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」神は今、その恵みの日において人々がむしろ神を拒むという選択をしている者たちに、太陽の恩恵ならず災いを与えられます。この方を拒んだら、この方による守りがない世界に投げ込まれます。

⁹ こうして人々は激しい炎熱で焼かれ、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。

「これらの災害を支配する権威を持つ神」とあります。そうです、全ての自然現象に権威と力を持っておられる方がいます。この方を認めるかそうでないかということが、悔い改めの根幹にあります。神がおられるという、神の主権と力を認めることが、神を信じることの初めです。思い出してください、この災いが下る前に、御使いが永遠の福音を携えて、こう宣言しました。「14:7 神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」そして、福音の始まりについて、パウロはこう述べました。「ローマ 1:18-20 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」

ところが、彼らは、「神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。」とあります。黙示録 13 章にも、冒瀆している獣の姿があります。これは必ずしも口にして、神を罵

ることに限りません。神の存在自体を苦々しく思う心、この方を拒む思い、そしてこのような苦しみに対してさらに神に対して苦々しくなること、このことを話しています。そして、神は理由なしに、苦しみを与えておられません。悔い改めそうなのに、それなのに、何か過ちを犯したから神が酷く扱われるのではありません。彼らが神への不信を抱いていて、神を拒むことに対して、神が恩恵を与えない状態を、彼らに引き渡すということに他なりません。C.S.ルイスは地獄について、こう言いました。「最終的には、二種類の人がいることになる。神に対して『あなたの御心がなりますように』という人と、神が『あなたの意志の通りになるように』と言われる人とに。」神は人に自由意志を与えられたゆえ、神を拒む者に無理やり神がおられる世界に入れさせることはできないのです。

2B 獣の座 10

¹⁰ 第五の御使いが鉢の中身を獣の座に注いだ。すると、獣の王国は闇におおわれ、人々は苦みのあまり舌をかんだ。

第五の御使いの鉢ですが、ついに、「獣の座」にぶちまけられます。獣の国の本拠地です。ちょうど戦争で言うなら、国の指令室に爆撃を落とすようなものです。獣の座については、黙示録 13 章でさっきも読みましたが、こう書かれていました。「13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした。」像があって、もうひとりの獣が、物が言うようにさせていました。この像を拝まないと殺していたのです。その像自体に、鉢がぶちまけられました。

すると、「獣の王国は闇におおわれ」とあります。なぜかは書かれていませんが、云わば首都機能が麻痺したので、国全体が電気を使えなくなったような感じであろうと想像します。そして暗くなる災いは、もちろん出エジプト記において、第九の災いにありました。

そしてここで大事なのは、「人々は苦みのあまり舌をかんだ」とあります。この舌を噛むというのは、地獄に墮ちた者たちが、「歯ぎしりする」というのに似ているでしょう。「マタイ 13:42 火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」燃える火の炉がありますが、大患難では太陽の炎熱です。「8:12 しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」暗闇がありますが、ここでは獣の座がつぶれることによる暗闇です。まだ彼らは地上にいますが、それでも地獄と同じ災いを受けています。その中で歯ぎしりしています。これは、自分の失ったものに気づいた者たちの強い怒りの反応です。自己中で、自己陶醉型の人が、自分の思い通りにならなかった時の反応です。単なる拷問のような苦しみに耐える姿ではなく、悔い改めず、未だ高ぶり、自分を愛している人々の姿です。

このようにして、主が獣の国に対する、容赦ない災いをぶちまけます。聖なる方、真実な方が、獣の国がご自分の聖徒たちに対して行ったことに対する、正しい裁きを下しておられるのです。私

たちは、このように勧められています。「ロマ 12:19-21 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。20 次のようにも書かれています。「もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになるからだ。」21 悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」